鹿児島県立短期大学紀要　第63号　2012年12月26日発行
人文・社会科学篇　抜刷

楽府新編陽春白雪の系統と復原

Text Restoration of *Yuefu Xinbian Yangchunbaixue* and Its Genealogy

土　肥　克　己
DOHI Katsumi

楽府新編陽春白雪の系統と復原

土肥克己

『楽府新編陽春白雪』は楊朝英が編纂した元代散曲の選集で、同類の書物のなかではもっとも古いものである。『陽春白雪』に対する従来の研究は基本的に新しいテキストの発見と整理に尽きると言っていい。二十世紀になって既知の二種とは異なるテキストが二度にわたって発見され、『陽春白雪』はそのたびに面目を新たにしてきた。それは収録作品の増加という歓迎すべき収穫をもたらすとともに、それぞれ性格が異なり欠落も多い四種のテキストが並立するという事態を招き、『陽春白雪』の本来の姿をますます見えにくいものにしてしまった。『陽春白雪』と楊朝英に関する資料が著しく欠如することともあいまって、『陽春白雪』研究はいまだ基礎が定まらない状態で現在に至っている。『陽春白雪』を含め元代の散曲選集はいずれも性格が不明瞭なため扱いにくく、散曲研究は『全元散曲』のように新たに整理されたテキストを利用するのが主流となっているが、本来は当時のテキストを中心に据えたうえで『全元散曲』を適宜参照しながら進めるべきものだろう。小論ではこうした認識のもと、国外で実施した散曲テキストの調査結果をふまえつつ『陽春白雪』諸本の特徴を整理し、それら諸本のもととなる原型の復原を目標にしている。もちろん復原は本物と等しいものではありえないだろうが、その作業過程を通して多くの知見が得られるはずである。

一

『陽春白雪』には主要なテキストが四種確認され、元刊本、残元本、九巻本、六巻本と呼ばれている。まずはじめに諸本の性格を整理しておこう。

『陽春白雪』諸本の性格はその収録作品に端的に表れている。巻末にそれぞれの収録作品の対照表を添付しておいた。この表からわかるように、共通の祖本を基準に考えれば諸本はすべて残本である。新しいテキストが発見されるたびに『陽春白雪』の収録作品は着実に増えていったものの、その不完全な収録状況のため祖本がいったいどれくらいの規模だったのか予測するのを困難にしている。

『陽春白雪』の構成で特徴的なのは、諸本の分巻がすべて異なることである。例えば残元本の巻一は元刊本の前集巻一から巻三までの三巻に相当し、また九巻本の後集巻二は六巻本の後集巻一となる。このような複雑な対応関係は以降の論証に不都合なので、小論では『陽春白雪』を九巻本の分巻に従ってAからIまでの九区画に分割する。諸本の巻を指示するときは、例えば九巻本前集巻一は「前一（A）」のように区画を補って表記する。区画Bには元刊本前集巻二と巻三が相当するので、それぞれ「前二（B上）」「前三（B下）」として区別する。残元本巻一はAとBの二区画にわたるので「巻一（AB）」、巻二は同様に「巻二（CD）」と表記する。この措置によって分巻から生じる混乱を防ぐことができるだろう。

各区画の内容について簡単に触れておく。散曲作品は区画B以降に配置され、区画Aには散曲制作の手引きとして「唱論」と「大楽」が収められている。区画BからEまでは小令、区画FからIが套数であり、ともに散曲の下位分類をなす。小令は一首の歌曲のことをいい、套数は複数の歌曲をグループ化したものである。このような内容は分巻の如何を問わず基本的に同じ順序のまま諸本に継承されている。諸本の個別の性格については書誌情報を見てみよう。

『陽春白雪』には元代の刊本が二種伝わり、そのひとつが「元刊本」と呼ばれている。元刊本は前集五巻後集五巻からなり、行格は

半葉十六行、行二十七字、匡郭は高さ一六九ミリ、幅二三〇ミリで、作品の収録状況は対照表に示したとおりである。全体を前集と後集の二つに大きく分けるのは分集本という形式で、宋元時代特有の出版形態である。[1] 現在は南京図書館に所蔵され、『続修四庫全書』『中華再造善本』にも影印されている。影印本には校訂の跡が多数確認でき、黄丕烈の跋（元刊本巻末、また『蕘圃蔵書題識』巻十）によればそれは柳如是の筆跡とされる。復原にはこの校語が重要な役割を果たす。のちに元刊本は徐乃昌によって『随盦徐氏叢書』の一種として精巧に覆刻され、『続修四庫全書』刊行以前はこれを通して元刊本を想像するしかなかった。隋樹森『新校九巻本陽春白雪』の「校訂後記」（中華書局、一九五七年。二〇三頁）によれば随盦叢書本には誤りが多いらしく、元刊本が影印された今日ではその価値は半減してしまった。[2] 任訥は残元本等によって元刊本を校訂し、『散曲叢刊』の一種としてはじめて『陽春白雪』の校本を出版した（中華書局、一九三一）。ただ隋樹森が指摘しているように実際には元刊本ではなく随盦叢書本を底本に使用しているので、利用する際には注意を要する（前掲書、二〇四頁）。

もうひとつの元代の刊本が残元本で、やはり南京図書館に所蔵されている。これまで影印されたことはなく、『盆山書影』所載の巻一第一葉と黄丕烈の跋二葉の書影以外はふつう見ることができない。筆者にとっても残元本を見ることは宿願だったが、最近になってようやくそのマイクロフィルムを閲覧し、以降の論証に必要な情報を得た。このテキストは、黄丕烈の跋（残元本巻末、また『蕘圃蔵書題識』巻十）がすでに「残元刻」と称しているように区画ＡからＤに相当する巻一と巻二のみが伝わり、他のテキストのような前後集にはなっていない。行格は半葉十七行、行二十八字、匡郭は高さ一八六ミリ、幅二五〇ミリで、元刊本の版式と比べるとやや大きく、字数も多い。元代散曲選集のひとつ『梨園楽府』（『四部叢刊』三編所収。半葉十七行、行三十字、匡郭高さ一九〇ミリ、幅二四〇ミリ）の版式に雰囲気がよく似ている。今回の閲覧では一字一字を校勘する時間はなかったが、字句の異同については『新校九巻本陽春白雪』や散曲叢刊本の校語を利用すれば、ある程度まで把握できる。

九巻本は一九五五年に隋樹森が北京図書館で再発見するに及んで世に知られるようになり、彼の『新校九巻本陽春白雪』はその校訂の成果である。[3] 九巻本は清抄本で、前集四巻後集五巻に分集されている。半葉十行、行二十字で、『文学評論』一九五九年第四期の挿図として収められた後集巻三（Ｇ）の書影を半葉だけ見ることができる。筆者は九巻本についてもすでにマイクロフィルムを閲覧している。なお、現在通行している許金榜氏と馬清福・劉剛の両氏による二種の注釈は、ともに隋樹森の校本にもとづいている。[4]

さらに六巻本は一九七九年に遼寧省図書館で職員の陳加氏が再発見し、一九八一年に遼寧省図書館から『楽府新編陽春白雪』、次いで一九八五年に遼瀋書社から『明抄六巻本陽春白雪』として影印されている。前集三巻後集三巻に分集され、行格が半葉十行、行二十三字という明代の藍格抄本である。このテキストはＤ、Ｅ、Ｉの三区画が完全に欠落している。『明抄六巻本陽春白雪』には詳細な校記が付いているのだが、元刊本などの『陽春白雪』諸本ではなく『全元散曲』と対校してしまったために、十分な効果が得られていない。

現存するテキストとしては国家図書館（旧北京図書館）にもう一種の清抄本が所蔵されていて、ここでは士礼居抄本と呼ぶことにする。これは『蕘圃蔵書題識』巻十の元刊本と残元本に関する記述のなかで「旧銭鈔本」あるいは「周丈香巖蔵旧鈔本」と呼ばれるテキストを、黄丕烈（室名は士礼居）がさらに抄写したものである。「旧銭鈔本」は「旧残鈔本」の誤りで、周香巖は蔵書家の周錫瓚を指す。半葉十

行、行二十字で、前集四巻後集五巻に分集されている。これもマイクロフィルムで確認したところ、内容は九巻本とほぼ一致した。ただ区画Aが完全に欠落し、区画Bも前半が欠落している点だけが大きく異なっている。区画Aがなくなって九巻本より一巻分少なくなるところを、残った区画Bの後半を無理に二つに分けることで前集巻一、巻二に加工してある。なお、『蕘圃蔵書題識』では残元本に由来するテキストとみなしているが、これは黄丕烈が九巻本を見ていないために生じた誤解である。比較の対象が元刊本と残元本しかなければ、誰でも残元本に似ていると思うだろう。

以上のテキストのほかにも『蕘圃蔵書題識』巻十には元抄本十巻とされるものが著録され、すでに散佚してしまってはいるが復原に欠かせない存在になっている。『蕘圃蔵書題識』は銭謙益と葉樹廉の識語を合わせて転載し、それによればこのテキストは元刊本同様柳如是の旧蔵書で、銭謙益が元刊本を用いて校訂を加えたらしい。黄丕烈はその筆跡が元刊本の校語と一致するとしたうえで銭謙益のものと断じているようだが、元刊本の跋では柳如是のものとしていたのでどのような状況なのかはっきりしない。とにかく元刊本の校語はこの元抄本を利用したものであることは確実で、校語を通して元抄本の状態を想像することができる。元抄本は黄丕烈の蔵書が散出する過程で楊紹和の手に渡り、その『楹書隅録続編』巻四にも著録されるが、その後の所在はわからない。楊以増、楊紹和父子が海源閣に蓄えてきた書物は北京図書館や山東省図書館などに分散したらしいが、元抄本は所蔵されていないようである。(5)

二

『陽春白雪』祖本を復原するためには、系統の把握が不可欠である。諸本を容易に見られない環境では、いま復原に必要な範囲で系統の骨格を把握することに努めたい。

一般に元刊本と残元本は初編と重編という関係で理解されているが、それは正しくない。元刊本ののちに残元本が編集されたとする認識は、任訥が散曲叢刊本『陽春白雪』に付した「提要」に示されている。(6)のちの隋樹森も校本の「校訂後記」でやはり残元本は後出と指摘し（二〇三頁）、『中国大百科全書』中国文学Ⅱ（中国大百科全書出版社、一九八六）で呂薇芬氏が担当した楊朝英の項目では九巻本や六巻本も重編されたと考えているように見える。このような認識は、残元本の区画CとDには元刊本にない作品が収録されているため、元刊本出版後に増補されたとみなしていることに起因する。しかし『陽春白雪』のような坊刻本の場合、書坊のような出版業者は宣伝効果を高めるために、増補した部分に「新添」「新増」等の文字を陰刻で附刻して強調するのが通例となっていて、『集注東坡先生詩』『増修箋註妙選群英草堂詩余』にその実例を見ることができる。増補のより普遍的な方法としては、もとの前後集はそのままにし、その後ろに続集や別集のような目立つ形で追加する方法を選ぶはずである。坊刻本の編集はむしろのちのものほど不完全になる傾向があり、筆者は初編、重編という直線的な関係ではなく、『陽春白雪』祖本がさまざまな欠落を経て、現在に伝わる形に加工されたと考えている。坊刻本の加工はふつう何らかの痕跡を残すものなので、見分けるのはそれほど難しくない。

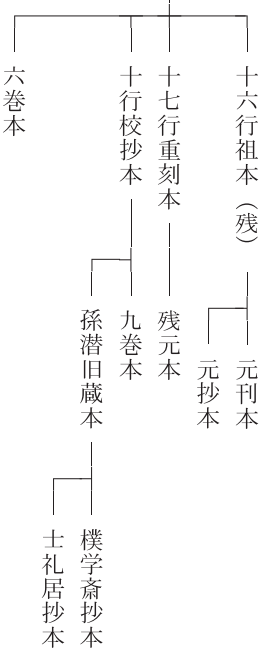
元刊本には書坊による加工の痕跡を数多く指摘できる。まず前五（D）の最後の葉にある張小山「満庭芳」は作品数が「八段」と標記されていながら実際には七首しか存在しない。これは加工の明白な痕跡であり、対照表からわかるように元刊本はこの葉以降が欠落しているため、書坊はこの葉の末尾にある「満庭芳」を一首削り去り、そこに「楽府新編陽春白雪巻之五　前集」という尾題を埋め木によって追

加し、この巻に欠落がないかのように偽装しているのである。同様に後一（E）の馮海粟「黒漆弩」が「七首」の標記に対して作品は三首しかないのも、その次の葉が欠落したためである。元刊本の欠落はほとんどがこのような加工によって偽装されていて、わずか五十葉あまりの元刊本が前集五巻後集五巻の完本に仕立てられている。小論ではこうした欠落部分を区画に応じて「欠落D」「欠落E」のように表記している。

残元本にも加工痕のあることが黄丕烈によってすでに指摘されている。残元本に付した彼の跋によれば巻一と巻二の標題は巻上と巻下に筆で書き改められていたので、黄丕烈はそれを修復したという。実際、書影で見るかぎり巻一の標題は「楽府新編陽春白雪巻之一」となっていて、「一」が「上」だった跡はまったく残されていない。残元本の版木自体に目立った加工の痕跡は確認できないものの、書籍仲介業者が二巻の残本を上下二巻の完本として偽装を試みていたことがわかる。元刊本と残元本における収録作品の差は書物のこのような編集で結果的に生じたものであり、単純に両者の刊刻あるいは印刷の先後を表わしてはいない。それは九巻本や六巻本にも当てはまり、欠落が偽装されたテキストを底本に用いたか、ところどころが欠落したテキストを矛盾のないように抄写したものと考えるべきであって、たまたま欠落が少なかったために元刊本や残元本より作品が増えたように見えるだけなのである。

収録作品数から諸本編集の先後を決定できないことが明らかになったので、それ以外の方法で系統を考えてみよう。筆者は左図のような系統を念頭に置いている。

陽春白雪系統図



大きく見ると、元刊本のような半葉十六行、行二十七字の版式を持つテキストのもととなる十六行祖本をまず設定する。分巻は九巻本の巻数に後集巻六を加えた前集四巻後集六巻を想定している。後集巻六に相当する区画は対照表にないが、ここで区画Jと呼ぶことにする。

元刊本は加工痕が明白であり、しかも区画Bを二つに分割して前集巻二と巻三にしていて、他のテキストには見られない特徴を持つ。これは新たに彫りなおしたものであって、版木の小規模な加工によって生じたものではない。仮に元刊本の区画Bが十六行祖本の版木に対して小規模な加工をすることで分割されたと考えてみよう。前二（B上）の最後の葉を占める「黄鶯児」套は小令を収める区画AからEまでのなかで唯一の套数であり、過去に何らかの加工を経ているだろうから、まずこれを取り除く。この部分は諸本とも欠落がなく、それを

疑うような根拠もないので、「黄鶯児」套を取り除くだけで前二（B上）と前三（B下）を自然な形で接続できなければならないが、大幅な改刻をしないかぎり元刊本のようなレイアウトには加工できない。区画Bの分割はやはり元刊本固有の特徴であり、元刊本は十六行祖本を重刻したものとみなせる。ただし区画B以外では、偽装の状況から見て十六行祖本の版木がかなり利用されている。[7]

残元本は区画E以降を欠落しているから、そのもととなる十七行重刻本を設定することができる。なぜ重刻本なのかというと、任訥の記録からその前身が十六行祖本であることが判明するからである。任訥は散曲叢刊本の「弁言」（第四葉裏）において、残元本巻二（C）にある商政叔「潘妃曲」には、元刊本の当該箇所の行を入れちがえて彫った部分があり、残元本は元刊本をもとにして作られたと指摘している。この入れちがえがなければ残元本を今回の系統図のなかに位置づけることはできなかったので、任訥の指摘はたいへん貴重である。ただし残元本が依拠したのは欠落のある元刊本そのものではないはずだから、ここでそれを十六行祖本と訂正しておく。ところで、元刊本における前二（B上）と前三（B下）の接続箇所を残元本で見てみると、そこに加工の跡はまったく見られず、自然に接続している。九巻本や六巻本もその点は同様であるから、結局、区画Bを分割するのは元刊本固有の特徴であり、十六行祖本は区画Bを分割していなかったということがわかる。

さらに十七行重刻本の分巻についてもある程度推定できる。残元本の系統の特徴は可能なかぎりつめこむことであり、行数や一行の字数を増やし、改行を最小限にして空白を減らすことで、密な版式を追求している。このような版式は、無理にでも誇張して巻数や葉数を大きく見せようとする分集本の編集方針とは逆行するので、分集はされていなかったと考えられる。十七行重刻本の分巻は区画AからJまであったとして、これを残元本の版式に当てはめると、巻一（AB）、巻二（CD）、巻三（EF）、巻四（GH）、巻五（IJ）の五巻ほどだったと推定でき、このうち巻三以降が完全に欠落したのが現在の残元本である。

九巻本については孫潜旧蔵本、樸学斎抄本、士礼居抄本を含めた十行校抄本の系統を考えてみたい。このうち十行校抄本、孫潜旧蔵本、樸学斎抄本は散佚してしまったが、九巻本の性格を知るためには欠かせないテキストである。[8]まず士礼居抄本について考える。『蕘圃蔵書題識』巻十の元刊本と残元本に関する記述のなかでは周錫瓚の所有するテキストを借りて抄写したことだけが記されているが、マイクロフィルムで見ると巻末に跋が七行ある。最初の三行と次の二行はそれぞれ順治八年（一六五一）春と同秋の孫潜の跋を転写したもの、最後の二行は誰の跋かわからないが、次のように記されている。

孫潜夫跋舊鈔本陽春白雪九卷士禮居傳録
共一百十七番

これにより士礼居抄本は黄丕烈が孫潜の跋がある抄本、つまり孫潜旧蔵本（葉数は百十七）を抄写したものであることがわかる。当然、孫潜旧蔵本も士礼居抄本同様、区画Aすべてと区画B前半が欠けている。次に樸学斎抄本については張金吾『愛日精廬蔵書志』巻三十六に著録され、そこに転載された葉樹廉（室名は樸学斎）の順治十五年（一六五八）跋によれば、これもやはり孫潜旧蔵本を葉樹廉が抄写したものであり、上述の孫潜の二跋も転載されている。そして葉樹廉の康熙十九年（一六八〇）跋を見ると、そこにはほかのテキスト（陸貽典所蔵の抄本）を用いて前集の欠落部分を補ったことが記され、士礼居抄本の特徴と符合する。[9]孫潜旧蔵本から樸学斎抄本、士礼居抄本の系統はこれで確かめられた。そして既述したように士礼居抄本と九巻本がほぼ同じ内容なら、孫潜旧蔵本と九巻本も同様の関係にあり、こ

の共通の祖本を十行校抄本と設定することができる。

筆者は九巻本が十行校抄本を介して十六行祖本につながると考えている。十行校抄本は様式が半葉十行の抄本で、かつ校本という特徴を持つ。ここで対照表を見てみよう。元刊本の欠落C～Hのうち、F、G、Hについては欠落の始まりが九巻本の欠落の始まりと一致している。例えば区画Gの欠落が始まる「一枝花」套より前には両本とも欠落はなく、作品収録状況はまったく等しい。そしてそれ以降では元刊本が完全に欠落し、九巻本はところどころが欠落している。区画F、Hもそうであり、区画C、DについてもF、G、Hほど顕著ではないが同様の現象が起きている。区画Eについては一見したところ九巻本に欠落がないように見えるが、後一（E）の張小山「小梁州」二首にある原注から欠落の存在が判明する。

右二首原版缺、抄補在此。

この部分は幸いに欠落作品を補うことができたらしいが本来は欠落箇所であり、区画Eでもやはり他の区画と同じ現象が起きている。したがって九巻本はところどころに欠落のある「原版」と元刊本とを合わせて作成した校本ということがわかる。[10] 士礼居抄本が九巻本とほとんど同じ様式、同じ内容（先の原注も含む）であることを考え合わせると、共通の祖本の形態はおそらく抄本であり、行格は半葉十行、行二十字だったろう。これを抄写したのが九巻本であり、のちに区画A・Bに欠落が生じたあとで抄写したのが孫潜旧蔵本であると結論づけられる。

十行校抄本が「原版」と元刊本を合わせた校本ということはすでにわかったが、さらにこれが元刊本を用いて「原版」を校勘したものであることを証明することで、「原版」が十六行祖本ということもわかる。校勘作業の様子は区画Bの「黄鶯児」套の配置から推定できる。九巻本の「黄鶯児」套にはまた原注がある。

右二段附二卷末。

「黄鶯児」套は九巻本の前二（B）末にあるのにそれをわざわざ「二巻末」と記すのはなぜかというと、この「二巻末」が九巻本の前集巻二を意味していないからである。つまりこの「二巻末」は元刊本の前二（B上）末であり、そこに「黄鶯児」套があるのだが、十行校抄本が底本にした「原版」ではこの位置に「黄鶯児」套はなく、しかもその前の楊澹斎「湘妃怨」の後ろには直接次の白仁甫「慶東原」が配置されていたので置き場所に困り、しかたなく「原版」の巻末の位置に置いたことを意味している。この「原版」はもちろん刊本であり、分巻が九巻本と同じであるはずなので、その特徴を満たすのは系統図のなかでは十六行祖本以外にありえない。以上のことから、九巻本の前に十行校抄本が存在し、系統としては十六行祖本につながることが確認できた。ただし底本となった十六行祖本は、九巻本の作品収録状況を見てもわかるように欠落がかなり激しく、後六（J）も完全に失われていただろう。

元抄本もやはり十六行祖本を底本にして抄写したと思われる。元抄本は元刊本の校語が依拠したテキストなので、当然その底本は元刊本とは異なるテキストである。また、校語には元刊本の欠落C、D、E、Gに対して「〇葉要抄補」のように欠落を指摘した箇所がある。これは元抄本の版式が元刊本と等しいことを示したものと考えられる。このような校語のある欠落部分は、その葉数分を取り除いたあと簡単な加工を施すだけで、元刊本のような形に偽装できるようになっている。例えば先に示した前五（D）の張小山「満庭芳」がそうだった。後一（E）の馮海粟「黒漆弩」の加工痕についても、欠落葉の直前の切れ目がよく、直後の葉の第一行で次の曲牌「乾荷葉」がちょうど始まるため、作品数「七首」を「三首」に改刻しわすれていたことを除けばその中間の欠落を感じさせない。[11] 他の部分も欠落は葉単位と

思われ、それが元抄本と一致するのなら版式もおそらく同一のはずである。このように元抄本が元刊本と同じ半葉十六行、行二十七字の版式をしているなら、共通の祖本は十六行祖本とみなせる。

六巻本は区画A、Bが九巻本と一致するので、やはり十六行祖本が底本だったと考えられる。六巻本は十六行祖本に直接つなげ、元刊本と元抄本に対してはその残本である十六行祖本（残）を中間に設けたのは、欠落F、Hが元刊本と元抄本に共通するからである。欠落F、Hには元刊本に校語がないので元抄本もその部分は欠落していたはずであり、両本がもとづいた十六行祖本も当然そこは欠落していたことになる。そこでこの部分を収録する六巻本の祖本とは区別するため、少なくとも区画F、Hに欠落のあるものを十六行祖本（残）と設定する必要がある。なお、六巻本の後集は巻の番号が九巻本とずれるが、六巻本は区画Eを欠くため区画Fを巻一にして数えなおしたのだろう。番号の数えなおしは士礼居抄本でもおこなわれていて、抄本においてはよく見られる現象である。

隋樹森は『陽春白雪』に現存諸本にはない「後集巻六」の存在を指摘した（前掲「校訂後記」二〇八頁）。それは白仁甫の『天籟集摭遺』所収の「悩煞人」套が『陽春白雪』の「後集巻六」から採録したことを明記していて、しかも諸本の区画A～Iには確かに未収であるためである。「悩煞人」套は小石調の套数であるから、後集のそのあたりにあったとしても不思議ではない。また、区画Bの「黄鶯児」套も本来は套数を収める区画F以降に配置されていたはずであり、それが「後集巻六」の可能性も十分にありうる。「後集巻六」をどう扱うべきかについては、元抄本と合わせて考えたほうがいい。元抄本は『蕘圃蔵書題識』や『楹書隅録続編』では十巻と著録され、前後集かどうかは明記されていない。元抄本は十六行祖本を抄写したものであり、十六行祖本はこれまでの考察から九巻本のような分巻だったはずなので、九巻本の分巻を基準にすると前集四巻と後集五巻の合わせて九巻となり、これでは元抄本の十巻にまだ一巻足りない。しかしこれに後集巻六を追加することができれば、前集四巻後集六巻の計十巻となり元抄本の巻数に一致する。筆者が十六行祖本を前集四巻後集六巻と想定するのはこのような理由からである。

以上で系統の概略は示せたと思う。本来ならば文字の異同も仔細に検討すべきだが、諸本を容易に見られない環境で隋樹森校本・散曲叢刊本の校語、『明抄六巻本陽春白雪』の校記だけではまだ明確な結論を引き出せていない。しかし系統を構築する目的は系統そのものを完璧にすることではなく、系統を手がかりとして祖本を復原することにある。系統をここまで構築できれば、次の復原の段階に進むことができる。

三

『陽春白雪』の復原は対照表に示したような諸本の収録作品をただまとめただけでは不十分である。それは「後集巻六」の存在や諸本が経てきた欠落と加工の過程から察せられるだろう。そこで小論では前節で示した系統図に従って次のような三段階による復原を試みる。

第一段階　元抄本の復原
第二段階　十六行祖本の復原
第三段階　十七行重刻本の復原

『陽春白雪』祖本復原の手がかりは元抄本の復原によってはじめて導き出せる。元抄本の復原では元刊本に施された校語を根拠にして、現存諸本とは異なる新しいテキストを再生する。十六行祖本（残）については元抄本と同じ内容であるから特に復原するまでもないので、元抄本が復原できれば次には十六行祖本の復原が視野に入ってくる。十六行祖本は『陽春白雪』最初のテキストと設定しているので、復原

の意義は大きい。そして十六行祖本が復原できれば、版式を調整することで残元本のもとの姿である十七行重刻本を復原できる。前節では十七行重刻本を五巻と推定したが、その適否も判断できるはずである。

元抄本の復原は複数の手続きを試行する必要があるため、この節では『陽春白雪』諸本を用いた復原の可能性を検討してみよう。元刊本や残元本は重刻を経ているし、九巻本が校本であることもすでに見てきたとおりで、六巻本も文字の異同の初歩的調査ではやはり校本のようなので、結局、元抄本が十六行祖本からもっとも近い位置にあると思われる。元抄本は散佚してしまったとはいえ、幸い元刊本には元抄本によると思われる校語が書き込まれ、影印本でも相当数を確認できる。この校語には単純な字句の訂正のほかに、元刊本の欠落に関わる覚え書きが四か所記されている。

（欠落C）徳勝樂白仁甫八段、得勝令、殿前歡四葉、要抄補。
白仁甫の「徳勝楽」八首から「得勝令」「殿前歡」までの四葉、要抄補。

（欠落D）普天樂起十二葉、至仙呂錦橙梅止、要抄補。
「普天楽」からの十二葉、仙呂「錦橙梅」まで、要抄補。

（欠落E）其下有子胥解劍圖起、至逋齋八首、共四葉要抄。
これ以下の「子胥解剣図」（馮海粟「鸚鵡曲」第一首）から劉逋斎の「四塊玉」八首まで全部で四葉、要抄補。

（欠落G）一枝花起七葉、要抄補。
「一枝花」から七葉、要抄補。

このように元刊本の校語は欠落した曲牌と欠落葉数を詳細に記録している。元刊本には区画FとHにも欠落葉があるが、ここには校語が見当たらない。また元刊本には収録され、元抄本では欠落している作品もあるかもしれないが、小論では常に復原可能性の最大値を目標にしているので、その点については特に考慮せずに作業を進めていく。

元刊本の欠落を補充するには現存諸本を利用するのがもっとも近道だろう。はじめに残元本を用いて欠落CとDの補充を試みる。残元本の版式を適切に調整して欠落Cを補充すると、校語の記載どおりちょうど四葉になる。[12] 区画Cでは残元本に収録される以外の作品は現存諸本には存在しない。つまり元刊本の欠落葉を補充するには残元本の利用が有効であり、元抄本の区画Cはこれで復原できたと考えていいだろう。

残元本は残存部分に関していえば作品の欠落はなく、作品配列を含めて信頼していいと思われる。区画Aは諸本とも完全に一致し、区画Cは元刊本欠落葉の復原によって残元本の有効性が示された。区画Bにおいては元刊本や九巻本にある「黄鶯児」套が残元本にはないが、残元本のように区画Bに収めないのが十六行祖本のもともとの状態だったことはすでに述べたとおりである。残元本を欠落C、Dの復原にしか使えないのが惜しまれる。その欠落Dも残元本では途中までしか復原できないので、九巻本を併用しなければならない。また残元本にはない欠落EとGに対しても九巻本を利用して復原を試みる。

まず欠落Dを、残元本に存在する部分についてはそれを用いて補充してみよう。版式の調整のしかたによって補充葉数は変動するが、だいたい三葉半から四葉半となる。現存諸本のなかで欠落Dを補充できるのはほかに九巻本のみである。校語によれば欠落十二葉は「普天楽」から「錦橙梅」までとされ、九巻本はこの記述と合致している。残元本で補充したあとに続けて、それ以外の作品を九巻本で補充すると、様式の調整後は残元本の補充分と合わせて五葉半から六葉半になる。これは区画Dの欠落葉数十二葉が現存諸本を用いただけでは決し

て復原できないということを明瞭に示している。欠落EとGについても九巻本では十分に補充できない。欠落Eを補充できるのは九巻本以外にはなく、同様に復原を試みると二葉半から三葉となり、ここの欠落葉数四葉にはやはり届かない。欠落Gは套数であり、元刊本の校語では七葉欠落している。套数に対しては元刊本の基本的な様式に合わせて補充すると、三葉にしかならない。九巻本による復原に限界があることは明らかだろう。

既述したとおり、九巻本の各巻には基本的に欠落があると考えるべきである。九巻本には前四（D）のように欠落が分散する特徴がある。これは葉単位の欠落ではなく虫食いや汚損、漫漶によるものと思われ、底本の状態がかなりわるかったことを示唆している。復原後の元抄本前四（D）を見ると、九巻本の欠落箇所は第五～八葉のかなりの面積を占め、底本の状態を彷彿とさせる。『陽春白雪』諸本には常にこのような欠落の可能性があることを留意しておかねばならない。

欠落Gはさらに六巻本で補充することができる。六巻本は欠落Gに補充した九巻本の作品をすべて含んでいる。六巻本も元刊本とは様式が異なるため適切に調整したうえで補充すると、補充葉数は七葉となって校語とぴったり一致する。かつ九巻本がやはり分散しながら欠落していることを六巻本は教えてくれる。[13] 区画A、B、Cや欠落Gの状況を見るかぎり、六巻本は残存部分に大きな欠落はないだろうと筆者は考えている。[14] 例えば欠落Fは元抄本も欠落していたと思われるが、ここは六巻本が存在するのでそれを利用すればほぼ復原は可能だろう。六巻本は区画DとEの欠落に見るようにおそらく冊単位で欠落している。区画D・EとI・Jの二冊が失われたことで、現在の区画A・B・CとF・G・Hの二冊六巻になったと推定できる。六巻本の欠落もまた非常に残念である。

いま欠落Cを残元本で、欠落Gを六巻本で復原できたが、欠落DとEの復原は未達成で終わった。欠落Dで残元本に含まれる部分の四葉程度は問題ないとして、九巻本で補った部分には欠落が予想される。九巻本による欠落Eの復原もその予想を支持する結果となっている。このように元抄本は現存諸本をいかに駆使しても完全には復原できないことがわかった。必然的に『陽春白雪』以外の資料を活用しなければならない。

四

元明時代の散曲集のなかには編集時に利用した書物の作品配列がそのまま保存されることがあり、『陽春白雪』の作品配列は『楽府群珠』に吸収された。『陽春白雪』諸本によっては復原しきれなかった欠落を『楽府群珠』の利用でどこまで補充できるか、その可能性を見極めたい。

『楽府群珠』は従来ほとんど研究対象とされてこなかったので、断片的な情報しか得ることができない。編者や編纂経緯についてはまったくわからず、明代の散曲を多数収録するので明代の成立ということがわかる程度である。盧前が一九五五年に商務印書館から出版した排印本がもっとも普及している。『楽府群珠』のテキストは筆者の調査によって確認できたものだけでも五種存在し（破損のため閲覧不可のもの一種を含む）、手元にあるのは台北の国家図書館（旧中央図書館）所蔵の明抄本のコピーである。どのテキストも内容は基本的に同じで残本の系統であり、主要な九つの宮調のうち三つしか含まない。宮調構成は中呂宮の曲牌二十一調と南呂宮の六調で全体の四分の三を占め、残りは双調の二調となっている。[15] 従来もっとも注目を集めたのはその書眉に書き込まれた出所の注記である。そこにはいくつかの散曲集を示す文字が出所として示され、『陽春白雪』も「陽」と記されている。隋樹森はこれを根拠にして『陽春白雪』の現存諸本には未収

の劉逋斎「四塊玉」二首を佚曲として校本の附録に採録している。このことは逆に『楽府群珠』の注記に用いた『陽春白雪』は現存諸本とは別種のテキストであり、注記がそのテキストの収録範囲にしか及んでいないことを示してもいよう。

筆者の手法は『楽府群珠』の作品配列を根拠にして、『楽府群珠』が利用した先行書の形に『楽府群珠』を分解し、『陽春白雪』諸本に未収の作品を抽出しようというものである。『楽府群珠』の収録範囲は中呂宮と南呂宮のほかは双調が二調のみにすぎないものの、それはちょうど元刊本『陽春白雪』の欠落DとEにある復原未達成部分に重なっていて、復原の前進を助けている。『楽府群珠』がどのような先行書を利用しているのか、中呂宮の「金字経」に含まれる作品を例にして見てみたい。「金字経」に含まれる作品を原書の配列どおりに並べると次のようになる。

張小山四十一首　以上個人作品集
張雲荘四首　以上出所未詳
無名氏三十七首
盧疎斎二首　王挙之一首　劉時中一首　任則明四首　以上『楽府群玉』[16]
徐甜斎四首　喬夢符二首　以上『太平楽府』
馬致遠三首　呉仁卿九首　貫酸斎七首　以上『陽春白雪』
鮮于去矜一首　以上『太和正音譜』
無名氏四首　以上『梨園楽府』
誠斎三首　史廷直一首　郭汝平八首　失註十一首　無名氏二首　以上明人
失註八首

このように作品が先行書ごとに一か所にまとめられていることがわかる。『陽春白雪』は区画Eに「金字経」を収録し、その作品配列は張小山作品を除き『楽府群珠』にそのまま反映されている。ここでの張小山作品のように、ひとつの作品が複数の先行書に収録される場合、『楽府群珠』はふつう一か所に整理して適当なまとまりのなかに配置し、数か所に分散するのを回避している。「金字経」の例では、『陽春白雪』に十首、『太平楽府』に十六首あった張小山の作品が「張小山四十一首」に、また、『陽春白雪』にあった呉仁卿の「夢中邯鄲道」「謝公東山臥」二首が盧疎斎の作品として『楽府群玉』のまとまりのなかに集約されている。配列が不規則に乱れることもあるものの、基本的には「金字経」以外の曲牌も含めて『楽府群珠』は先行書に対するこのような機械的操作で編纂されている。

『楽府群珠』が利用した先行書の性格を把握したうえでないと『陽春白雪』の分離に支障が出るので、ここでまとめて紹介しよう。

（一）曾瑞卿の作品集

『録鬼簿』の記録から曾瑞卿には元代すでに『詩酒余音』という作品集があったとされるが、現在は散佚してしまった。盧前『飲虹簃所刻曲』所収の同名の書は盧前が諸書から曾瑞卿の作品を採録してまとめたもので、当時のものとは別書である。『楽府群珠』に曾瑞卿の作品集を示す出所注記は一切ないが、配列から曾瑞卿の作品集を利用したことは確かで、あるいはそれが『詩酒余音』かもしれない。

（二）張小山の作品集　注記は「全」「金」

出所注記では「全」「金」であるが、何を指すか未詳である。[17]張小山の作品集は数種伝来していて、そのなかでは『新刊張小山北曲聯楽府』がもっとも古い系統のものである。元刊本は伝わらず、複数現存する抄本のうち一種が『続修四庫全書』に影印されている。この『北曲聯楽府』は後世の整理を経ていて、もともと前集、後集、続集、別集の四つに分集されて流通していたものが、曲牌で分類しなおされている。その分類作業は機械的なもので、各曲牌は依然として四集の枠

組みを残し、例えば「金字経」は前集十九首、後集四首、続集十二首、別集五首の計四十首を収める。『楽府群珠』は『北曲聯楽府』四集のすべてを収録し、「金字経」の場合はさらに出所未詳の一首を含めて計四十一首となっている。

『北曲聯楽府』の四集は成立時期をある程度反映している。楊朝英は『陽春白雪』には基本的に前集の作品を採録し、のちにやはり散曲選集の『太平楽府』を編纂したときには、後続別集を中心にしつつ『陽春白雪』未収の前集作品も採録している。特に『太平楽府』は『北曲聯楽府』と作品配列がよく一致するので、『太平楽府』が『北曲聯楽府』を利用したことはまちがいない。このようにして、『陽春白雪』の復原に関係してくるのは前集の範囲に絞り込むことができる。

（三）張養浩『雲荘張文忠公休居自適小楽府』

注記は「雲」「云」「雪」

張養浩の作品集は『続修四庫全書』にも影印された明刊本が一種伝わるのみで、『楽府群珠』はこの『雲荘楽府』所収の作品を規則的に配列している。『楽府群珠』の作品配列に特徴的なのは、まれに『太平楽府』の配列を残していることである。例えば『楽府群珠』の張養浩「山坡羊」十七首は、はじめに『太平楽府』所収の作品を配列し、そのあと『雲荘楽府』からその他の作品を配列している。このような『楽府群珠』の配列規則は張小山作品に対しても適用され、またその規則がよくわずかな乱れを伴うところも似ている。筆者はそれが当時の散曲選集の特徴と考えているが、今は『雲荘楽府』の配列が『楽府群珠』に生かされていることがわかれば十分だろう。

（四）湯舜民『筆花集』　注記は「筆」

『筆花集』は長らく存在が知られていなかったが、隋樹森「元人散曲的幾次新発現」（注（3）を参照のこと）によれば一九三一年ごろ馬廉によって発見されたらしい。湯舜民は楊朝英より世代が下り、その作品が『陽春白雪』に含まれる可能性はない。

（五）『楽府群玉』　注記は「玉」「王」

『楽府群玉』は元代の散曲選集四種のひとつで、三種の抄本が現存している。『楽府群玉』は未整理の状態で流布したらしく、構成の乱れがかなり見受けられる。注（16）に示したように、任訥と隋樹森は各々校本を整理し、抄本の未整理な点を多数校訂している。そのためかえってもとの抄本の原型がくずれてしまったともいえる。任訥による散曲叢刊本にはもとの抄本の目録が別に掲載されているので、作品配列を知るのに便利である。

『楽府群玉』は個人の作品集をそのまま取り込んで編纂されたと思われる。張小山の『北曲聯楽府』はその好例で、『楽府群玉』に収録される張小山の作品はすべて前集のものであり、曲牌の配列は一部を除いて一致し、曲牌内での作品配列も規則的である。『陽春白雪』の張小山作品も基本的に『北曲聯楽府』の前集に限られ、さらに『楽府群玉』所収の作者はほとんどが『録鬼簿』に名が見えているので、おそらく『陽春白雪』と同時期ごろの作品を採録範囲にしたのだろう。『楽府群玉』の作品は『陽春白雪』にも収録されていた可能性がある。

（六）楊朝英『太平楽府』　注記は「太」「大」「冬」「冬」

『太平楽府』はテキストが豊富であるにもかかわらずすべてが同系統で、しかも欠落はほとんどなく、きわめてわかりやすい。『陽春白雪』との間で収録作品に重複があり、そこに作者名の変動が見られるなど理由のつかめない現象も呈しているが、基本的には『太平楽府』所収の作品は『陽春白雪』の復原候補にはならないと考える。

（七）楊朝英『陽春白雪』　注記は「陽」「日」

『陽春白雪』が『楽府群珠』に利用されていることは疑いないが、

『楽府群玉』や『太平楽府』と比べてその地位は低かったらしい。それは『楽府群珠』の張小山作品などに『太平楽府』の配列が反映されるのとは対照的に、『陽春白雪』の配列は無視されているためで、やはりこれも当時の散曲選集の特徴といえそうである。したがって、『楽府群珠』に吸収された（一）から（四）までの個人作品集から配列だけを見て『陽春白雪』の作品を分離することは難しい。

（八）その他の選集、『太和正音譜』『中原音韻』

作品収録状況から選集と思われるものがいくつかある。そのうちはっきりしているのは元代散曲選集の『梨園楽府』で、出所注記には「梨」「禾」「未」の記号がある。さらに「賽」「貝」「具」「兵」と注記される選集と、「絲」「紙」「系」「氷」「景」と注記される選集の二種がある。この二種に該当する散曲選集は未詳で、作品収録状況から見ると内容的には『梨園楽府』に近い印象を受ける。小論では仮に前者を「賽字楽府」、後者を「絲字楽府」と呼ぶ。ほかにも「旧」という出所注記があるが、「賽字楽府」「絲字楽府」、それとも第三の選集なのか判断できなかった。また、『太和正音譜』の注記は「太」、『中原音韻』は「中」である。これら数種は『楽府群珠』が利用した先行書のなかでもっとも地位が低く、他の先行書と重複する作品は必ず他の先行書へ優先的に集約し、余った作品があれば先行書の最末尾に固められる傾向がある。したがってこれらの書物の作品が最末尾でないところにも分散して配置されていれば、それは他の先行書の収録作品として扱われている可能性が高い。

以上が『楽府群珠』の先行書で、それぞれが復原に与える効果は一様ではない。次節ではこれらを用いて元抄本の復原に取りかかりたい。

五

『楽府群珠』利用の準備ができたので、復原作業を再開しよう。先に取りあげた「金字経」を例にして、『楽府群珠』から『陽春白雪』の作品を分離するための具体的な手続きを示す。その手続きは元明作品の弁別、選集作品の帰属、個人作品の帰属から構成される。

はじめに「金字経」の作品群から元人と明人の作品を弁別する。誠斎は朱有燉の号で、史廷直は史忠を指し、さらに郭汝平も明人である。「誠斎三首」の直前の「無名氏四首」は三首までが『梨園楽府』に含まれるので、「誠斎三首」以降の作品は明人のものとみなしていい。『楽府群珠』では元と明の区別がかなり厳密に守られていて、その境界を探すのはそれほど難しくはない。

次に元人の作品を前節で挙げた先行の選集に帰属させる。「金字経」の帰属状況はすでに示したとおりで、そのうち「無名氏三十七首」と、「無名氏四首」中で『梨園楽府』未収の「暗想才郎貌」一首とは帰属がはっきりしない。「無名氏三十七首」は『全元散曲』未収で、しかも『全明散曲』が収録するので、後者の編者である謝伯陽氏は明人の作品と判断したようである。配置から考えて元人の作品のはずだが、出所注記が「旧」であるため筆者も帰属を特定しきれていない。「暗想才郎貌」は『全元散曲』『全明散曲』ともに未収ということもあって、『楽府群珠』以外の収録状況は今のところわからないが、四首のうち三首が『梨園楽府』から採録されたのなら、元人の作品とみなしていい。この点についてはさらに検討を加える。

筆者は「鮮于去矜一首」と「無名氏四首」が『陽春白雪』から採録された可能性があると考える。出所注記はまったくないものの、配置と標記からそのことが判断できる。『楽府群珠』の元代作品はほとんどの場合先行書に帰属させることが可能で、しかも選集のまとまりが乱れたところは一か所もない。すると『陽春白雪』のまとまり直後に配置される「鮮于去矜一首」と「無名氏四首」も『陽春白雪』の可能性が生じる。その根拠は無名氏という標記にある。「無名氏四

首」のうち三首が『梨園楽府』のものなので、一見するとこれは『梨園楽府』のまとまりのように見えるが、実は無名氏という標記は『梨園楽府』ではありえない。『梨園楽府』は大半の作者が不明で、その場合は作者名も一切標記しないという特徴がある。つまり作者名に関しては失注ということになり、この三首も作者名は失注である。このような態度は『楽府群珠』にも共通し、無名氏と明記する作品と失注の作品が厳格に峻別されている。そして「無名氏」あるいは「不知名氏」というような標記が存在するのは先行書では『陽春白雪』『太平楽府』「賽字楽府」『太和正音譜』に限られる。収録作品が確定している『太平楽府』『太和正音譜』にこの四首は含まれていないので、配置とも考え合わせれば、『梨園楽府』になかった「暗想才郎貌」一首は確実に『陽春白雪』または「賽字楽府」にあったはずである。

『陽春白雪』にあったと仮定した場合、他の三首についても『陽春白雪』に採録されていたと思われ、そのためこの四首は全体が「無名氏」と標記されるに至ったと筆者は考える。選集所収の作品は作者名が一致しないことも多く、『楽府群珠』はひとつの作品が複数の作者のもとに重複するのを避け、どちらか一方に帰属させている。「無名氏四首」も『陽春白雪』と『梨園楽府』で作者名が一致せず、結局『陽春白雪』の無名氏を選択したのだろう。「無名氏四首」が『陽春白雪』の範囲であるなら、もちろんその直前の「鮮于去矜一首」も同様に『陽春白雪』のものとなる。「賽字楽府」にあったと仮定した場合は、「鮮于去矜一首」と「無名氏四首」の両方、または「無名氏四首」のみ、という二通りの可能性がある。『陽春白雪』にしろ「賽字楽府」にしろ同程度の可能性であるので、これ以上選択肢を絞り込むことはできないが、『陽春白雪』の収録作品候補とみなすことに問題はないだろう。

三つ目の手続きとして、『楽府群珠』に吸収された曾瑞卿、張小山、張養浩の作品のうち、いくつかは『陽春白雪』にもあった可能性を指摘できる。「金字経」の「張小山四十一首」のうち十首がすでに元刊本『陽春白雪』に収録されている。この十首は既述したようにすべて『北曲聯楽府』前集に含まれる。張小山は楊朝英の友人でもあり、『北曲聯楽府』前集と元刊本『陽春白雪』に共通する曲牌については、そのすべてに作品が採録されている。「金字経」の場合は元刊本に「十首」と明記されているので、それ以上の収録はありえないが、『陽春白雪』諸本未収の曲牌については『北曲聯楽府』前集から確実に何首かが採録されていたと断定できる。[18] 曾瑞卿と張養浩の作品についてはもともと『陽春白雪』の現存諸本にも採録されず、張小山『北曲聯楽府』前集のような手法も適用できない。したがって作品集自体から作品を抽出することは現状では無理だろう。

個人作品の帰属には別の手法も存在する。呉仁卿（号は克斎）の「上小楼」は『楽府群玉』のまとまりのなかに「呉克斎十一首」として配置されるが、このうち「幽欄小軒」「正如魚似水」「相知笑他」「将咱撒開」の四首は『楽府群玉』にはなく、『楽府群珠』によって現在に伝わる作品である。[19] これは出所注記がないものの、先行選集に所収のものがここに集約されたと考えられ、その提供元は『陽春白雪』や『梨園楽府』「賽字楽府」「絲字楽府」がありうる。ただ現状ではそのどれかを決定するまでには至っていない。

以上のような手続きにより、『楽府群珠』から次の八調四十三首を『陽春白雪』の復原候補として抽出できる。

中呂　迎仙客　張小山（七首）
中呂　上小楼　呉克斎（四首）　張小山（一首）
中呂　十二月帯過堯民歌　失注（三首）
中呂　斉天楽過紅衫児　張小山（四首）
中呂　売花声　失注（二首）

南呂　玉嬌枝　　無名氏（十四首）
南呂　四塊玉　　張小山（三首）
南呂　金字経　　鮮于去矜一首　　無名氏四首

かっこで作品数を括ったものは、そのすべてが収録されていたとはかぎらないことを示す。元刊本には欠落FとHに欠落を指摘する校語がないように元抄本は完本ではないだろうから、『楽府群珠』から抽出した作品のすべてを元抄本の復原に利用できるわけではない。鮮于去矜と無名氏の「金字経」五首は『陽春白雪』では区画Eの張小山十首の後ろに配置されるべきであるが、元刊本の校語はこの箇所には見られない。そのためこの五首は元抄本の復原では除外するのが適当だろう。さらに隋樹森が『楽府群珠』の注記から補充した劉逋斎の「四塊玉」二首についても、欠落Eの元刊本校語にはっきり「逋斎八首」と記され、九巻本で補充した八首によってすでにその数が足りているので、やはり今回の復原では除外した。[20]

それではこれらの作品を用いて元抄本『陽春白雪』の欠落DとEを補充してみよう。欠落Dに対し、張小山「朝天曲」の後ろに次の曲牌を補充する。

迎仙客　上小楼　十二月帯過尭民歌　斉天楽過紅衫児　売花声

様式を適切に調整すると、残元本・九巻本の補充分と合わせて七葉半から九葉になる。欠落Dの復原目標十二葉にはまだ満たないが、小論ではここまでが限界である。次に欠落Eに対し、無名氏「初生月児」の後ろに無名氏「玉嬌枝」と張小山「四塊玉」を補充する。すると四葉半から五葉半となり欠落葉数四葉を超過してしまう。補充した作品の数は復原可能性の最大値であり、元抄本にはその一部分が収録されていたのだろう。

ここまでで元抄本は欠落CとGはほぼ完全に、DとEについてはある程度まで復原できた。そこで次に『楽府群珠』から離れて後六（J）の復原を考えてみたい。対照表の区画Hを見ると六巻本は「酔花陰」套以降が欠落している。しかし既述したように六巻本が冊単位で欠けているという仮説が正しいとすれば、六巻本は区画Hに欠落はないことになる。それでは九巻本の後四（H）にある「酔花陰」二套と「粉蝶児」四套はどうなるのかというと、筆者はこれらがもともと後六（J）にあったもので、それが区画Hに混入したと推測している。そもそも「酔花陰」套の属する黄鍾宮は区画HとIの二か所に分散していて不自然である。区画Iは黄鍾宮の「願成双」套で終わっていて、もし同じ黄鍾宮の「酔花陰」套を区画Jに移動すれば、この不自然さは完全に解消される。さらに『天籟集摭遺』に後集巻六と出所が記されていた小石調「悩煞人」一套、および区画Bから商角調「黄鶯児」二套もここに補充すれば、元抄本の後六（J）に一定の体裁を持たせることができる。復原後の葉数は様式の調整後、四葉になる。後六（J）の復原は状況証拠ばかりで決定的な根拠に欠けているが、元抄本の各巻葉数のバランスから見ても矛盾はなさそうなので、あえて可能性を示すことで議論の手がかりにしたい。

それでは元抄本の葉数を計算してみよう。欠落C、D、E、Gの欠落葉数ははっきりしているので、元刊本の葉数に単純に加算すればいい。後六（J）については四葉まで復原できた。復原結果は次のようになる。

前一（A）四葉　　前二（B）十二葉　　前三（C）八葉
前四（D）十六葉
後一（E）八葉　　後二（F）六葉　　後三（G）十二葉
後四（H）四葉　　後五（I）六葉　　後六（J）四葉

六

元抄本の復原が完了したので、最後に十六行祖本、十七行重刻本の

復原に進もう。この復原により元代の刊本を新たに二種再生することができる。

系統図からわかるように十六行祖本（残）は元抄本と同じ内容だから、元抄本では復原しなかった欠落FとH、および区画Eの「金字経」に作品を補充すれば、十六行祖本を復原できる。まず区画FとHは六巻本があるので、既述したように六巻本所収の作品をそのまま補充するだけでいい。注意点は区画Fの「祆神急」一套、区画Hの失注「喬牌兒」一套、および馬致遠「夜行船」二套のうち「酒病花愁何日徹」の一套の配置をどう処理するかである。九巻本と六巻本で配列が異なるのはここだけで、不思議と元抄本の校語がない欠落FとHの周辺に集中しているのだが、これが何を意味しているのかは解明できていない。今は六巻本の配列に従うことにする。様式を適切に調整したうえで、区画Fについては楊舜臣から失注までの「点絳唇」套を、区画Hについては「梅花引」套の後ろに続けて「蝶恋花」套から「夜行船」套までを補充すると、区画Fは全体で九葉、区画Hは八葉になる。次に区画Eには『楽府群珠』から抽出した鮮于去矜と無名氏の「金字経」五首を補充できる。様式を調整してから張小山「金字経」の後ろに補充すると、区画Eは全体で九葉になる。以上の三区画の補充と元抄本を合わせたものが十六行祖本であり、筆者は『陽春白雪』の最初の形はこのようだったと考えている。復原後の葉数を次に示す。

前一（A）四葉　前二（B）十二葉　前三（C）八葉
前四（D）十六葉
後一（E）九葉　後二（F）九葉　後三（G）十二葉
後四（H）八葉　後五（I）六葉　後六（J）四葉

十七行重刻本は第二節において五巻と推定した。系統図から十七行重刻本は十六行祖本を密な版式に加工したものであるから、十六行祖本の様式を調整して五巻にすると葉数は次のようになる。

巻一（AB）十三葉　巻二（CD）十九葉　巻三（EF）十四葉　巻四（GH）十七葉　巻五（IJ）八葉

残元本が欠落する前はこのような規模だったと思われる。区画Jの分量がはっきりしないので巻五（IJ）が少ないものの、バランスから見て不自然さは感じられない。なお、元抄本の欠落Eは欠落葉四葉に対し、復原葉数は四葉半から五葉半で超過していた。十七行重刻本の巻三（EF）にはこの超過分も含まれている。

筆者がこの研究に着手したときは、国外に所蔵されていて影印本等もない残元本や九巻本などのテキストをまったく見ることができなかった。そこで最初におこなったのは残元本や九巻本の様式推定である。限られた情報から残元本や九巻本の再現を試みた。のちにマイクロフィルムを見るに及び、推定した様式が実物をほぼ再現できていて安堵したのだが、それでも一行の字数の無理な詰め込みなど推定しようのない要素も多かった。今回の復原も仮説を積み上げることで到達したものなのでおそらく誤りを含んでいるだろうが、復原過程での推論や復原された祖本を通して見えてくるものもあるのではないかと思う。

注

（1）分集本については、拙著「宋元時代の建陽と廬陵における分集本出版」（『東方学』第百九輯、二〇〇五）に詳しい。

（2）隋樹森の「校訂後記」は、もと一九五五年十二月四日付の『光明日報』に「九巻本『陽春白雪』校訂記」として発表された。

（3）九巻本の発見経緯は、隋樹森「元人散曲的幾次新発現」（『文献』総第四期、一九八〇）にもとづく。該論文は彼の『元人散曲論叢』（斉魯書社、

一九八六）にも再録されている。

（4）『陽春白雪』の注釈本は次の二種である。

許金榜『陽春白雪』注釈本、中州古籍出版社、一九九一。

馬清福・劉剛『陽春白雪』下、春風文芸出版社、一九九五。

春風文芸出版社の上冊には宋末元初の趙聞礼が編纂した詞の選集で書名も同じ『陽春白雪』が収録されている。

（5）楊紹和の子の楊保彝が編纂した『海源閣宋元秘本書目』（『訂補海源閣書目五種』所収。斉魯書社、二〇〇二）にも元抄本は著録され、四冊に装丁されていたことがわかる。王紹曾氏の補注によれば、所在はやはりわからないという。

（6）散曲叢刊本に付された任訥の「提要」と「弁言」は、もと「校補陽春白雪提要弁言校例」として『国立中山大学語言歴史学研究所周刊』第四巻第三十七期（一九二八）に掲載したものを改訂して収めている。

（7）区画B分割については、後六（J）の版木が完全に欠落したことが影響したのだろう。欠落後そのまま出版すると前集四巻後集五巻となるので、前後で巻数をそろえようという意識がはたらいたと見られる。このような意識は分集本出版ではほかにも例があり、『東萊先生分門詩律武庫』はもともと二十巻後集十巻だったのが、後印本では巻首や巻尾の標題を加工して（前集）巻十六～二十を後集巻十一～十五に改刻している。

（8）孫潜（一六一八―？）は字を潜夫または凱之といい、句容の人である。樸学斎抄本を作成した葉樹廉（一六一九―八五）は室名を樸学斎といい、孫潜と親しく付き合い、よく本の貸し借りもしていた。

（9）『愛日精廬蔵書志』によれば樸学斎抄本は前集五巻後集五巻であり、前集がどのように分巻しているのか記述からははっきりしない。士礼居抄本同様の前集四巻と欠落部分を補った補遺の一巻で合わせて五巻と考えるのが自然だろう。

樸学斎抄本は莫友芝『蔵園訂補邵亭知見伝本書目』（中華書局、一九九三）巻十六下七十三頁、江標『宋元本行格表』巻下にも著録されているが、誤りがいくつかある。前者によれば、

張金吾蔵陸敕先抄元刊本、毎頁三十二行、行三十七字。

陸勅先は陸貽典（一六一七―？）のことであるが、張金吾が所有していたのは樸学斎抄本であって陸貽典のテキストではない。また、一葉三十二行（半葉十六行）はいいとして、行三十七字のテキストはふつう考えられないし、『宋元本行格表』自体を見ても『陽春白雪』の一行の長さは突出している。この誤りの原因は、『愛日精廬蔵書志』に転載された陸貽典の跋を見るとわかる。これは葉樹廉が陸貽典のテキストを人から借りたときに転写したもので、それによると陸貽典は元刊本を借りて自分の所有するテキストを校勘し、元刊本の特徴も付記している。

辛丑（順治十八年）五月二十七日、燈下校完。元刻本、毎葉三十二行、行三十七字。

元刊本の版式からすれば「行三十七字」は明らかに行二十七字の誤りで、おそらく陸貽典のテキストには「毎葉三十二行＝二十七字」とでも書かれていたのを読み違えたのだろう。『蔵園訂補邵亭知見伝本書目』や『宋元本行格表』は実物を確かめずに、この記載を樸学斎抄本の行格と思い込んで孫引きしたと思われる。

（10）元刊本を利用しているなら、元刊本のすべての作品は九巻本に収録されているはずだが、区画B末の張小山「寿陽曲」三段だけが例外になっている。小論ではこの点についてはやむなく保留にしている。

（11）元刊本が馮海粟「黒漆弩」を「七首」と標記するのは、次の「鸚鵡曲」四首を含めて数えている。「鸚鵡曲」は「黒漆弩」の別名である。

（12）諸本を利用して元刊本に作品を補充するときには、様式を元刊本に合わせて適切に調整しなければならない。主要な要素は作者名・標題の様式、作品間の連接であるが、詳述すると煩瑣に過ぎるので、今はその点を十分に考慮して作業を進めていることを述べるにとどめたい。

(13) 九巻本の書影から、九巻本が欠落をどう処理しているかが確認できる。書影には後三（G）にある劉逋斎「端正好」套の末尾と関漢卿「一枝花」套の冒頭が写っている。六巻本はこの中間に無名氏「一枝花」套があるのだが、九巻本では完全に詰めてしまっているのでこれを見ただけではそこに欠落があるとは気づきようがない。九巻本はこのように底本で破損している作品は省略して次の作品に続けていると思われる。

(14) 六巻本は区画B末の張小山「寿陽曲」三段が欠落している。十六行祖本と十行校抄本・六巻本との間に中間のテキストを設定すれば説明できなくもないが、ここは注（10）でも述べたように九巻本も欠落していて、筆者はこれを合理的に説明できるまでには至っていない。今は無理に系統を組み立てず、保留にしておきたい。

(15) 排印本『楽府群珠』には解説を兼ねた盧前自序が一頁あるだけで、その日付が一九三五年と古いこともあって十分な情報が得られない。『楽府群珠』については、ほかに任訥『曲譜』巻二（『散曲叢刊』所収）、『類聚名賢楽府群玉』（上海古籍出版社、一九八二）の隋樹森「前言」、王重民『中国善本書提要』（上海古籍出版社、一九八三）にも記載がある。

構成は盧前本では巻一が中呂宮十五調、巻二が南呂宮六調、巻三が双調二調、巻四が中呂宮六調となっていて小論もとりあえずこれに従うが、これははなはだ問題が多い。筆者が実見したテキストにはいずれも巻の表記はなく、盧前が便宜的に番号を付けたものと断定していい。しかしもし番号を付けるなら、盧前本でいえば巻四、巻一、巻二、巻三の順に番号を振るべきである。それは『楽府群珠』が『太和正音譜』の曲牌配列を意識しているからで、順序は中呂宮、南呂宮、双調の順、そして中呂宮の二巻は巻四、巻一の順でなければならない。このことは台北の国家図書館所蔵本を見るとはっきりする。このテキストは四冊一組で巻と冊が対応していて、盧前も使用していることが自序から確認できる。その巻四の書皮は他の巻より傷んでいて、これが第一冊だったことを明らかに物語っている。書皮が傷んできて帙の一番下に重ねておいたせいで盧前に巻四と誤解されたのだろう。なお、『中国善本書提要』がこのテキストを二巻と著録するのは、目録が巻一と巻三の二冊にだけあったからだろう。曲牌の整理にも疎漏が多いし、巻四は原稿の整理中に葉の順序が混乱したらしく意味の通じなくなったところが少なくとも三か所ある。最大の問題はその作品が誰のものかという帰属についてで、かなりの変更が必要になる。しかもこの問題は『楽府群珠』だけでなく、『全元散曲』や『全明散曲』の修正にもつながるので影響が大きい。

(16) 「盧疎斎二首」として収録される盧摯（号は疎斎）の作品は現存の『楽府群玉』には未収であるが、『楽府群珠』の出所注記に「玉」と記されていることからもともとは収録されていたとしていい。任訥による『楽府群玉』校本（『散曲叢刊』所収）はすでにこの手法によって、「金字経」のほか「折桂令」「朱履曲」「普天楽」に含まれる盧摯の作品の輯佚に成功し、隋樹森の校本もそれを継承している。ただし、『楽府群珠』の注記は厳密なものとはいいがたく、注記がなくても収録されていた可能性がある。さらに筆者が確認したところ任訥と隋樹森が見落とした「玉」の注記もあり、『楽府群玉』の両校本は修正が必要だろう。

(17) 北京の国家図書館には馬廉が『楽府群珠』を研究したときの資料が「楽府群珠」という名称で所蔵されていて、そのなかでは『楽府群珠』の出所注記「全」を「全集」と解釈している。また、『楽府群珠』の注記は略字が多く、略し方もかなりぶれがある。

(18) 「上小楼」の「張小山一首」は『北曲聯楽府』前集には未収の作品だが、これも『陽春白雪』にあった可能性がある。それは「上小楼」がもともと『北曲聯楽府』前集に収録されていた形跡があるからである。既述したように『楽府群玉』は『北曲聯楽府』前集をそのままの配列で取り込んでいるが、「普天楽」と「上小楼」だけは配置が異なる。特に「上小楼」は『北曲聯楽府』前集には未収にもかかわらず、『楽府群玉』と『楽府群珠』に

は採録されている。これは本来「上小楼」が『北曲聯楽府』前集に収録されていたことを示している。おそらく現在の『北曲聯楽府』整理時に欠落が生じたのだろう。

(19) 盧前本の「呉克斎十一首」を原本に即して厳密に説明すれば、標記は「呉克斎十二首」、実際の収録数は十一首という意味である。盧前本は原本の標記をかなり改めているので、正確な復原を期するためには原本の参照が必須である。

(20) 劉逋斎の「四塊玉」二首は、同様の理由で十六行祖本の復原からも除外した。劉逋斎にはこのほかにも九巻本の後一（E）に「寨児令」一首があり、小論では最後まで利用できていない。「寨児令」は越調の小令であるから本来なら区画Dに配置されるはずだが、この部分は元刊本、残元本、九巻本が完全に一致しているので、ここに移動する余地はまったくない。劉逋斎の「四塊玉」「寨児令」計三首は今回の復原ではすべて保留とせざるをえなかった。

区間A 元刊本前集巻一，残元本巻一，九巻本前集巻一，六巻本前集巻一

宮調	曲牌	作者	元刊本	残元本	九巻本	六巻本	
詞	念奴嬌一段	蘇軾	448	02	007	011	＊1
詞	蝶恋花一段	失注	448	02	008	011	
詞	鷓鴣天一段	晏幾道	448	02	009	012	
詞	望海潮一段	鄧千江	448	03	009	012	
詞	春草碧一段	呉激	448	03	009	013	
詞	模魚子一段	辛棄疾	448	03	010	013	
詞	雨霖鈴一段	柳永	449	03	010	014	
詞	生査子一段	朱淑真	449	03	011	014	
詞	石州慢一段	蔡松年	449	03	011	015	
詞	天仙子一段	張先	449	04	012	015	

区間B 元刊本前集巻二・三，残元本巻一，九巻本前集巻二，六巻本前集巻二

宮調	曲牌	作者	元刊本	残元本	九巻本	六巻本	
双調	蟾宮曲二段	庾吉甫	449	04	013	017	＊1
双調	蟾宮曲一段	姚牧庵	449	04	014	018	
双調	蟾宮曲一段	鄭徳輝	449	04	014	018	
双調	蟾宮曲二段	奥敦周卿	449	04	014	018	
双調	蟾宮曲一段	張子友	449	04	015	019	
双調	蟾宮曲一段	馬九皐	449	04	015	020	
双調	蟾宮曲一段	徐子芳	450	04	015	020	
双調	蟾宮曲一段	盍志学	450	05	016	020	
双調	蟾宮曲一段	趙天錫	450	05	016	021	
双調	蟾宮曲四段	劉太保	450	05	017	021	
双調	蟾宮曲四段	貫酸斎	450	05	018	022	
双調	蟾宮曲十六段	阿魯威	450	05	019	024	
双調	蟾宮曲四段	盧疎斎	451	06	022	030	
双調	百字折桂令一段	白無咎	451	07	023	031	
双調	蟾宮曲五段	張小山	451	07	024	031	
双調	湘妃怨四段	盧疎斎	451	07	025	033	
双調	湘妃怨四段	馬致遠	451	07	026	034	
双調	湘妃怨四段	劉逋斎	451	08	026	036	
双調	湘妃怨二段	阿魯威	451	08	027	037	
双調	湘妃怨一段	馬九皐	452	08	028	038	
双調	湘妃怨五段	張小山	452	08	028	038	
双調	湘妃怨七段	楊澹斎	452	08	029	039	
商角	黄鶯児二套	庾吉甫	452		047		＊2
双調	慶東原三段	白仁甫	453	09	031	042	
双調	慶東原四段	張小山	453	09	031	042	
双調	駐馬聽四段	白仁甫	453	09	032	043	
双調	沉醉東風二段	胡紫山	453	10	033	045	
双調	沉醉東風二段	徐子芳	453	10	034	045	
双調	沉醉東風一段	馮海粟	453	10	034	046	
双調	沉醉東風五段	関漢卿	453	10	035	046	
双調	沉醉東風三段	張小山	453	10	036	048	
双調	撥不断十段	馬致遠	454	10	036	048	
双調	清江引三段	貫酸斎	454	11	038	051	
双調	清江引四段	張小山	454	11	038	051	
双調	寿陽曲四段	姚牧庵	454	11	039	052	
双調	寿陽曲十四段	無名氏	454	11	039	053	
双調	寿陽曲一段	厳忠済	454	12	041	056	
双調	寿陽曲五段	貫酸斎	455	12	041	056	
双調	寿陽曲一段	阿魯威	455	12	042	057	
双調	寿陽曲一段	李寿卿	455	12	042	058	
双調	寿陽曲四段	盧疎斎	455	12	042	058	
双調	寿陽曲三十一段	馬致遠	455	12	043	059	
双調	寿陽曲三段	張小山	455	13			

区間C 元刊本前集巻四，残元本巻二，九巻本前集巻三，六巻本前集巻三

宮調	曲牌	作者	元刊本	残元本	九巻本	六巻本	
双調	潘妃曲十九段	商左山	456	01	049	067	＊1
双調	大徳歌十段	関漢卿	457	01	052	071	＊2
双調	碧玉簫十段	関漢卿	456	02	054	073	
双調	沽美酒帯過太平令二段	失注	456	02	056	075	
双調	楚天遥帯過清江引三段	馬九皐	457	03	056	076	
双調	雁児落帯過得勝令五段	庾吉甫	457	03	057	078	
双調	醉高歌帯過殿前歓一段	貫酸斎	457	03	058	079	
双調	徳勝楽八段	白仁甫		03	059	080	
双調	得勝令一段	張小山		04	060	082	
双調	得勝令四段	景元啓		04	060	082	
双調	得勝令四段	楊澹斎		04	060	083	
双調	殿前歓八段	盧疎斎		04	061	084	
双調	殿前歓六段	馬九皐		05	063	086	
双調	殿前歓八段	貫酸斎	欠落C	05	064	088	＊3
双調	殿前歓一段	貫酸斎		05		088	
双調	殿前歓五段	張小山		05	066	090	
双調	殿前歓二段	劉逋斎		06	067	091	
双調	殿前歓二段	阿里西瑛		06	067	092	
双調	殿前歓一段	楊澹斎		06	068	092	＊3
双調	殿前歓四段	楊澹斎		06		092	

区間D 元刊本前集巻五，残元本巻二，九巻本前集巻四

宮調	曲牌	作者	元刊本	残元本	九巻本	六巻本	
越調	天浄沙八段	白仁甫	458	06	069		＊1
越調	天浄沙一段	厳忠済	458	07	070		
越調	天浄沙四段	商政叔	458	07	070		
越調	天浄沙五段	張小山	458	07	070		
越調	小桃紅八段	楊西庵	458	07	071		
越調	小桃紅四段	馬致遠	458	07	073		
越調	小桃紅七段	張小山	458	08	073		
越調	小桃紅一段	楊澹斎	459	08	075		
越調	凭闌人七段	姚牧庵	459	08	075		
越調	凭闌人五段	張小山	459	08	076		
中呂	満庭芳二段	姚牧庵	459	08	076		＊3
中呂	満庭芳一段	姚牧庵	459	09	079		＊4
中呂	満庭芳二段	無名氏	459	09	077		
中呂	満庭芳七段	張小山	459	09	077		＊3
中呂	満庭芳一段	張小山		09	079		
中呂	普天楽二段	無名氏		09			＊5
中呂	普天楽三段	無名氏		09			
中呂	普天楽四段	張小山		10			
中呂	普天楽二段	張小山		10	079		
中呂	紅綉鞋三段	貫酸斎		10	080		
中呂	紅綉鞋一段	貫酸斎		10			
中呂	紅綉鞋十段	無名氏		10	081		
中呂	紅綉鞋一段	無名氏		10			
中呂	紅綉鞋五段	張小山		11	083		
中呂	紅綉鞋三段	張小山		11			
中呂	喜春来四段	張小山	欠落D	11	084		
中呂	喜春来九段	無名氏		11			
中呂	喜春来三段	無名氏		12			
中呂	山坡羊三段	張小山		12			
中呂	山坡羊一段	馬九皐		12	084		＊3
中呂	山坡羊二段	馬九皐		12			
中呂	朝天曲一段	無名氏			085		
中呂	朝天曲二十二段	馬九皐			085		
中呂	朝天曲三段	張小山			088		
仙呂	醉中天四段	無名氏			089		
仙呂	錦橙梅一段	無名氏			090		

陽春白雪諸本の収録作品（1）

区間E　元刊本後集巻一，九巻本後集巻一

宮調	曲牌	作者	元刊本	残元本	九巻本	六巻本	
仙呂	後庭花十首	呂止庵	460		091		＊1
仙呂	酔扶帰三首	呂止庵	460		093		
仙呂	酔扶帰一首	王和卿	460		093		
仙呂	遊四門四首	無名氏	460		094		
仙呂	遊四門二首	失注	460		094		
正宮	黒漆弩一首	無名氏	460		095		
正宮	黒漆弩三首	馮海粟	460		095		
正宮	鸚鵡曲四首	馮海粟			096		
正宮	小梁州三首	貫酸斎			097		
正宮	小梁州二首	張小山			098		
正宮	塞鴻秋三首	鄭徳輝			098		
正宮	塞鴻秋一首	馬九皐			099		
商調	知秋令四首	呂止庵	欠落E		099		
商調	知秋令四首	呉仁卿			099		
商調	知秋令四首	張小山			100		
大石	初生月児三首	無名氏			101		
南呂	四塊玉八首	劉逋斎			101		
南呂	乾荷葉八首	劉太保	461		103		
南呂	金字経三首	馬致遠	461		104		
南呂	金字経十一首	呉仁卿	461		105		
南呂	金字経七首	貫酸斎	461		107		
南呂	金字経十首	張小山	461		108		
越調	寒児令一首	劉逋斎			109		＊2

区間F　元刊本後集巻二，九巻本後集巻二，六巻本後集巻一

宮調	曲牌	作者	元刊本	残元本	九巻本	六巻本	
仙呂	賞花時一套	楊西庵	462		111	095	＊1
仙呂	賞花時九套	失注	462		112	096	
仙呂	翠裙腰一套	失注	462		116	103	
仙呂	翠裙腰纏令一套	呂止庵	463		117	104	
仙呂	八声甘州一套	鮮于伯機	463		118	105	
仙呂	八声甘州一套	王修甫	463		119	107	
仙呂	八声甘州一套	王嘉甫	463		120	108	
仙呂	八声甘州一套	石子章	463		121	110	
仙呂	八声甘州一套	彭寿之	463		123	111	
仙呂	八声甘州二套	失注	463		123	113	
仙呂	祇神急一套	白無咎	464		128	116	＊2
仙呂	点絳唇一套	不忽麻	464		125	117	
仙呂	点絳唇一套	楊舜臣				122	
仙呂	点絳唇一套	孫叔順	欠落F			123	
仙呂	点絳唇一套	王大学士				126	
仙呂	点絳唇一套	失注				129	

区間G　元刊本後集巻三，九巻本後集巻三，六巻本後集巻二

宮調	曲牌	作者	元刊本	残元本	九巻本	六巻本	
正宮	月照庭一套	無名氏	465		130	137	＊1
正宮	六幺令一套	呂侍中	465		131	138	
正宮	端正好一套	無名氏	465		132	140	
正宮	端正好二套	劉逋斎	465		133	142	
南呂	一枝花四套	無名氏				161	
南呂	一枝花一套	関漢卿			142	166	
南呂	一枝花一套	亢文苑			143	168	＊3
南呂	一枝花一套	亢文苑				169	
南呂	一枝花一套	馬致遠				170	
南呂	一枝花一套	王和卿				173	
南呂	一枝花一套	奥敦周卿			143	175	
南呂	一枝花一套	無名氏			144	177	
南呂	一枝花一套	失注				179	
南呂	一枝花一套	亢文苑	欠落G		145	180	
南呂	一枝花一套	失注				182	
南呂	一枝花一套	趙彦暉				183	
南呂	一枝花一套	失注				185	
南呂	一枝花一套	無名氏			147	186	
南呂	一枝花一套	失注			147	188	
南呂	一枝花一套	孫叔順			148	189	
南呂	一枝花一套	失注				190	
南呂	一枝花一套	貫酸斎				192	

区間H　元刊本後集巻四，九巻本後集巻四，六巻本後集巻三

宮調	曲牌	作者	元刊本	残元本	九巻本	六巻本	
越調	鬬鵪鶉一套	呉仁卿	467		150	195	＊1
越調	鬬鵪鶉二套	失注	467		151	197	
越調	鬬鵪鶉一套	王伯成	468		154	201	
越調	鬬鵪鶉六套	失注	468		156	203	
越調	梅花引一套	失注	469		163	214	
双調	蝶恋花一套	杜善夫				216	
双調	喬牌児一套	馬致遠				218	
双調	喬牌児一套	失注			171	220	＊2
双調	行香子一套	高文秀				222	
双調	行香子一套	李茂之				224	
双調	行香子二套	失注				226	
双調	夜行船一套	馬致遠				229	
双調	夜行船三套	失注	欠落H			231	
双調	夜行船一套	馬致遠			170	235	＊2
黄鍾	酔花陰一套	白無咎			164		＊2
黄鍾	酔花陰一套	陳子厚			165		
中呂	粉蝶児一套	失注			166		
中呂	粉蝶児一套	王仲誠			167		
中呂	粉蝶児一套	孫叔順			168		
中呂	粉蝶児一套	馬致遠			170		

区間I　元刊本後集巻五，九巻本後集巻五

宮調	曲牌	作者	元刊本	残元本	九巻本	六巻本	
双調	風入松一套	呂止庵	469		173		＊1
双調	風入松一套	失注	469		174		
双調	風入松一套	失注	469		175		
双調	新水令一套	無名氏	470		176		
双調	新水令一套	関漢卿	470		177		
双調	新水令四套	失注	470		179		
双調	新水令一套	蒲察善長	471		182		
双調	新水令一套	劉逋斎	471		185		
双調	酔春風一套	貫酸斎	471		187		
黄鍾	侍香金童一套	関漢卿	471		188		
黄鍾	願成双三套	失注	472		189		

＊1　数字はページ数を表わす。
　　元刊本：統修四庫全書本
　　残元本：原本
　　九巻本：新校九巻本陽春白雪
　　六巻本：明抄六巻本陽春白雪
＊2　網がけ部分は配列が変則的なことを示す。
＊3　縦線はテキストによって部分的に欠落や誤りがあることを示す。
＊4　曲牌は中呂「普天楽」が正しい。隋校本は訂正して配列を変更している。
＊5　曲牌は双調「殿前歓」が正しい。

陽春白雪諸本の収録作品（2）